

婦人科病理診断トレーニング

What is your diagnosis?

清水道生 編

＜書評者＞ 八重樫伸生（東北大学病院副病院長/産婦人科教授）

本書の特徴は、各疾患・病態が4ページでまとめられていること、各疾患のトップページに質問形式で臨床データと病理像のカラー写真が提示され、その裏ページにその解答があるQ & A形式をとっていること、その後2ページで病態と病理学的事項などの簡明な解説があること、全体を通した書式の統一が素晴らしいことなどにある。以下、本書を通読した直後の率直な感想を述べる。

日本婦人科腫瘍学会では卵巣がん、子宮体がん、子宮頸がんの3つの治療ガイドラインを発刊し、数年ごとに改訂を繰り返している。ガイドライン作成委員長をしながら改めて感じることは、「治療のスタートは常に病理診断にある」ということである。一方で、科学の進歩に伴い、婦人科腫瘍の領域でも疾患の病態理解は年々変化し続けており、それをフォローしつつガイドラインに反映していくことは重要である。例えば、子宮頸部病変でいえば悪性腺腫と分

葉状頸管腺過形成（LEGH）の概念がそうであるし、卵巣の境界悪性腫瘍での浸潤性インプラントがそうであろう。こういった疾患概念の提唱や病理診断基準の変化を理解する病理医による的確な病理診断が治療のスタートになり、臨床の場にも即座に反映される。

つまり、治療ガイドラインというものは、病理診断が共通でかつ的確であるという前提のもとに作成されているわけである。そして、病理医と臨床医がともに疾患概念を正確に理解し、疾患の共通理解のもとに診療を進めることが重要である。そのためのテキストが必要となるのはいうまでもないが、本書の素晴らしい病理写真の数々と、秀逸な解説がそういった役目を果たすのではないかと考える。

日本婦人科腫瘍学会では、5年前から婦人科腫瘍専門医試験を行っている。婦人科腫瘍専門医制度は主に臨床医を育成するためのものであるが、その要求する到達目標はたいへん高く、幅が広いも

のである。修練カリキュラムをざっと眺めてみると、臨床腫瘍学の総論的事項、婦人科腫瘍の診断と進行期決定、婦人科腫瘍病理組織・細胞診断、婦人科臓器の疾患とその評価法・治療法の選択、婦人科腫瘍に関連する手術などがあり、これらすべてを網羅して修練することは並大抵のことではない。専門医を取得する者の多くが産婦人科専門医を取得した後のいわゆる一般的な産婦人科臨床医である。忙しい日常診療の合間にこのような幅広い知識をどう得るか、特に病理診断トレーニングをどう効率よく受けるかという点は大変重要である。

これまでも病理医のためのテキストのようなものは多く刊行されていたと思われるが、婦人科腫瘍専門医向けに最適と思われる婦人科病理診断のテキストはなかったように思う。Q & A形式をとる本書は、まさにそういった婦人科腫瘍専門医を目指す先生方のバイブルになるのではないだろうか。

●B5 頁364 2010年
定価12,600円
(本体12,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00734-4]
医学書院刊